

一高機能自閉症児の誤信念課題遂行についてのアセスメントの事例

○日上耕司*・松岡勝彦*・大石幸二*・服巻 繁**

(筑波大学心身障害学系*・筑波大学心身障害学研究科**)

近年、自閉症児・者を対象にした「心の理論」に関する多くの研究によって、自閉症児・者が他者の心的状態を理解することが苦手であることが明らかにされ、自閉症理解に一定の成果を上げてきた。これらの研究の多くでは、言語性精神年齢に差がない自閉症群と健常群、精神遅滞群等の被験者に同じ課題を与え、その遂行の比較が行なわれている。すなわち、群間比較の実験計画を用い母集団としての自閉症児・者の「欠損部」を明らかにすることによって、個人差を捨象した自閉症の本質に迫ろうとするアプローチが採られている。

しかしながら、臨床的立場より認知的・社会的能力の実に多様な個々の自閉症児・者に目を向けるとき、これらの研究成果を具体的にどのように活用できるかについては、ほとんど有益な所見が得られていない現状に気づかされる。

本研究では、「心の理論」研究の成果を臨床場面にどのように適用できるのかに関する知見を得るための第一歩として、1名の高機能自閉症児に対し標準的な誤信念課題を実施し、その遂行を詳細に分析することによって、対象児のつまづきの原因を明らかにすることを目的とした。

方 法

(1) 対象児

対象児は小林(1980)の診断基準および他の複数の医療機関において自閉症と診断された男児1名であった。本研究開始時の生活年齢は11歳1カ月であり、小学校5年通常学級に在籍していた。10歳9カ月時に実施したWISC-Rの結果、VIQが63、PIQが69、IQが63であり、寺山(1995)の定義による「高機能自閉症」とみなされた。助詞の誤用等があるものの、日常会話には特に顕著な支障はなかった。就学前よりT大学において原則として週1回の指導を受けており、本研究課題もこの指導セッション内に行われた。指導セッションで

は他に文章理解、算数文章題、料理スキル、教科学習などの指導を受けていた。

(2) 手続き

①アセスメント1(セッション1~7):標準的な誤信念課題を通過できるかどうかを確認するため、Baron-Cohen, et al. (1985)のサリーアン課題およびPerner, et al. (1989)のスマーティー課題を実施した。サリーアン課題については、課題の提示形態(人形劇/実演)、場面設定などを変化させ、12回実施した。スマーティー課題については容器と物品を2通り用い、直前に誤答する他者を目撃する条件等を加え、6回実施した。

②アセスメント2(セッション8~23):サリーアン課題と同じ構造を持った課題場面として、「宝探し」場面を設定した。宝探しは、2~4名のプレイヤーが順に自分の宝物を隠し、全員が隠し終わった段階で各プレイヤーが自分の宝物を探すというものであった。各プレイヤーは条件によって、他者が隠す場面を見ることができ、できない場合があった。また、他者の宝物を他の場所へ移動することが可能であった。対象児の課題は、すべてのプレイヤーの行動を観察した後、a)○○先生は、自分の宝物をどの箱にかくしましたか?、b)○○先生の宝物は今どの箱にあるのでしょうか?、c)○○先生は、自分の宝物がどの箱にあると思っているのでしょうか?(信念を問う質問)、d)○○先生は、自分の宝物を取り出そうとして、(最初に)どの箱をあけるのでしょうか?(行動を予測する質問)、等の質問に答えることであった。質問の種類・語句、質問形式、解答形式、1セッションにおける試行数、プレイヤーの数等の条件をさまざまに変化させて行なった。

③アセスメント3(セッション21・22):質問の言語理解、特に「思う」などの心的状態に言及する語の理解度を調べるため、それらの語を用いた短文作成課題と語句並べ替え課題を行なった。

④アセスメント4 (セッション24・25) : 宝探しにおいて各プレイヤーが他者の隠す場面を見ていたかどうかを、対象児が正しく弁別しているかどうかを確かめるため、「見た／見なかった」テストおよび「見る＝知る」テストを行なった。「見た／見なかった」テストでは、宝探しの設定において、他者が隠す場面を見ることができるかできないかについて4種の条件下(遮蔽無、遮蔽無うつむき、遮蔽あり、遮蔽ありのぞき込み)にあるプレイヤーを対象児に観察させ、各プレイヤーが見ていたか見ていなかったかについての質問をした。「見る＝知る」テストでは、宝物の入った箱の横を素通りする人、箱の外側だけを凝視する人、箱の外側に触れる人、箱の中身をのぞき込む人の4種類の人を観察させ、箱の中身を知っている人が誰かを答えさせた。またその理由についても尋ねた。

⑤アセスメント5 (セッション26～29) : 質問文の言語的手がかりを変化させ、人形劇および実演によるサリーアン課題を各8回行なった。

⑥アセスメント6 (セッション30～33) : 質問文の特定の言語的手がかりに基づいて解答するだけでは正答できない条件を設け、宝探しを行なった。

⑦アセスメント7 (セッション34～36) : 宝探しを、各プレイヤーが他者の隠す場面を見ていたかどうか、他のプレイヤーの宝物の在りかを知っているかどうかについての質問を含めて行なった。

⑧アセスメント8 (セッション37) : 「見た／見なかった」テストおよび「見る＝知る」テストを再度行なった。

⑨アセスメント9 (セッション38・39) : 宝探しを、各プレイヤーが他者の隠す場面を見ていたかどうか、他者の宝物の在りかを知っているかどうかについての情報を明示する条件下で、プレイヤーが他者の宝物を探す際の当たり外れを予測させる質問を含めて行なった。

結 果

① アセスメント1 : サリーアン課題において、信念を問う質問および誤信に基づいた行動を予測

Table アセスメント3における解答例

短文作成課題

* 修学旅行は楽しかったと思う。

* 頭をつかって考えた。

* 思ひだすというのは考えると同じでむずかしい。

語句並べ替え課題

* きのう ひろし君は 海に 行きたい と思った

* おとうさんが おかあさんは 自分がデブだと思っ
ているとは 知らなかった

する質問に対し、対象児はすべて誤答した。またスマーティー課題においても、直前誤答者目撃条件では正答したが、それ以外ではすべて誤答した。

②アセスメント2 : 最終的に各質問に対してほぼ100%に近い正答率を示すに至った。

③アセスメント3 : 短文作成課題および語句並べ替え課題において、対象児はほぼ正しいと判断される解答をした (Table 参照)。

④アセスメント4 : 「見た／見なかった」テストおよび「見る＝知る」テストにおいて、対象児はほぼ100%の正答率を示した。

⑤アセスメント5 : 対象児は行動を予測する質問に対してほとんど誤答した。

⑥アセスメント6 : 対象児は信念を問う質問、行動を予測する質問のほとんどに誤答した。

⑦アセスメント7 : 「見ていたか」質問および「知っているか」質問の正答率はいずれも50%以下であった。

⑧アセスメント8 : 正答率は96%であった。

⑨アセスメント9 : 情報明示条件での他者の宝物探索成否質問の正答率は57%であった。

考 察

以上の結果より、i) 対象児は宝探し場面において「最初に」「思う」などの何らかの言語的手がかりを利用して機械的読み替えを行なって解答していること、ii) 「見た／見なかった」および「知っている／知らない」については、それだけに注目することができる場合には正しく弁別することができるが、iii) その情報を宝探し場面では利用していないことが明らかになった。